田

兵庫県文化財調査報告 第367冊

地

Z

淡路市

漫

跡

 ${\rm I\hspace{-.1em}I}$

山田地区遗跡皿

-(一)明神安乎線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

庫県文化財調査報告 第367冊

2010年3月(平成22年3月)

兵 庫 県 教 育 委 員 会

兵庫県教育委員会

淡路市

山田地区遗跡皿

-(一)明神安乎線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-

2010年3月(平成22年3月)

兵庫県教育委員会

例 言

- 1. 本書は、淡路市山田に所在する山田地区遺跡(大歳遺跡・宇和田遺跡・七反田遺跡)の発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は、(一)鮎原江井線道路改良・(一)明神安乎線道路改良事業に先立つもので、淡路県民局県 土整備部洲本土木事務所からの依頼を受け、兵庫県教育委員会が平成18年度に本発掘調査を実施した。 発掘調査は、前川建設株式会社が請け負い、実施した。
- 3. 本発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所(当時:現兵庫県立考古博物館)山田清朝・ 鐵 英記が担当した。
- 4. 調査後の空中写真の撮影および図化は、株式会社 ジャパックスに委託して行った。他の遺構写真の撮影・実測は調査員が実施した。
- 5. 整理作業は、平成21年度に兵庫県立考古博物館にて実施した。
- 6. 遺物写真の撮影は、株式会社谷口フォトに委託して行った。
- 7. 調査は、三角点をもとに三級基準点を設置しておこなった。座標は世界測地系に基づくもので、調査 地は第V系に位置する。
- 8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 9. 本書で使用した遺構番号は、遺跡ごとに呼称した。また、各遺構は以下のように呼称した。 掘立柱建物跡→SB、柱穴→P、土坑→SK、溝→SD
- 10. 第2図は、国土地理院発行1/50000地形図『洲本』『明石』『須磨』を縮小使用した。第5図は、平成5年作成(平成14年改訂)一宮町発行1/2500地形図を使用した。
- 11. 本書に用いた遺物番号は、遺跡ごとにつけ、それぞれ本文・挿図・図版ともに統一している。
- 12. 本書の編集は川村由紀の補助を得て山田が行い、全て山田が執筆した。
- 13. 本報告にかかわる遺物・写真・遺構図等は兵庫県立考古博物館に保管している。
- 14. 最後に、発掘調査および報告書の作成にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。ここに感謝の意を表するものである。

浦上雅史・平本雅稔・伊藤宏幸・大石雅一・足立敬介・坂口弘貢・定松佳重

目 次

| 第一 | 草 | ЩЩ | 地区遺跡 | |
|----|----|----|---|----|
| | 第1 | 節 | 地理的環境 ····· | 1 |
| | 第2 | 節 | 歴史的環境 | 4 |
| | | | | |
| 第2 | 章 | 調査 | の経緯 | |
| | 第1 | 節 | 調査の起因 | 7 |
| | 第2 | 節 | 確認調查 | 9 |
| | 第3 | 節 | 本発掘調査 | 11 |
| | 第4 | 節 | 整理作業 | 12 |
| | | | | |
| 第3 | 章 | 調査 | の成果 | |
| | 第1 | 節 | 大歳遺跡 | |
| | | 1. | 遺跡の位置 | 13 |
| | | 2. | A地区の調査 | 13 |
| | | 3. | B地区の調査 | 16 |
| | 第2 | 節 | 宇和田遺跡 | |
| | | 1. | 遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 20 |
| | | 2. | 調査の成果 | 20 |
| | 第3 | 節 | 七反田遺跡 | |
| | | 1. | 遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 25 |
| | | 2. | 調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 25 |
| | | | | |
| 第4 | 章 | まと | Ø | 30 |

挿 図 目 次

| 第1図 | 淡路市の位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ | 1 | 第21図 | 大歳遺跡 B 地区出土石帯 | 19 |
|------|--|----|------|----------------|----|
| 第2図 | 旧一宮町の位置 | 2 | 第22図 | 宇和田遺跡調査位置図 | 20 |
| 第3図 | 山田地区遺跡の立地 | 3 | 第23図 | 宇和田遺跡平面図 | 21 |
| 第4図 | 山田地区遺跡近景(南西から) | 4 | 第24図 | S D 03断面······ | 22 |
| 第5図 | 山田地区遺跡 | 5 | 第25図 | S D 04断面····· | 22 |
| 第6図 | 圃場整備と工事計画 | 7 | 第26図 | S D 05断面····· | 23 |
| 第7図 | 工事計画と調査位置 | 8 | 第27図 | 宇和田遺跡出土土器 | 23 |
| 第8図 | 確認調査位置図 | 10 | 第28図 | 宇和田遺跡出土錠前 | 24 |
| 第9図 | 調査前の大歳遺跡 B 地区 | 11 | 第29図 | 竣工後の七反田遺跡 | 25 |
| 第10図 | 七反田遺跡の調査 | 11 | 第30図 | 七反田遺跡調査位置図 | 25 |
| 第11図 | 竣工後の宇和田遺跡 | 12 | 第31図 | 七反田遺跡基本土層図 | 26 |
| 第12図 | 竣工後の大歳遺跡 | 12 | 第32図 | S B 01····· | 27 |
| 第13図 | 大歲遺跡調査位置図 | 13 | 第33図 | 七反田遺跡平面図 | 27 |
| 第14図 | 大歲遺跡 A 地区基本土層図 | 14 | 第34図 | S D01断面····· | 28 |
| 第15図 | 大歲遺跡平面図 | 15 | 第35図 | S D 02断面······ | 28 |
| 第16図 | A地区出土石鏃 | 16 | 第36図 | 出土石鏃 | 29 |
| 第17図 | A地区出土土器······ | 16 | 第37図 | 七反田遺跡出土土器 | 29 |
| 第18図 | 大歲遺跡 B 地区基本土層図 | 16 | 第38図 | 江戸時代の往還道 | 31 |
| 第19図 | 大歲遺跡 B 地区出土土器······ | 18 | | | |
| 第20図 | 大歲遺跡 B 地区出土砥石 | 19 | | | |

図 版 目 次

大歳遺跡

写真図版1 遺構

A地区全景 東から

写真図版 2 遺構

B地区遠景 東から

B地区全景 東から

写真図版3 出土遺物

包含層出土土器 (6 · 8~10 · 14 · 17)

包含層出土石器(S1)

写真図版 4 出土遺物

包含層出土石製品(S2~S4)

宇和田遺跡

写真図版 5 遺構

全景 南上空から 全景 北上空から

写真図版 6

全景 南から 全景 北から

北半部全景 南から

写真図版7 出土遺物

S K 01出土土器 (1)

S D03出土土器 (2・3・5・8・9)

写真図版 8 出土遺物

包含層出土金属製品 (M1)

七反田遺跡

写真図版 9 遺構

全景 東上空から 全景 北上空から

写真図版10 遺構

全景 北東から 西半部全景 東から

写真図版11 遺構

東半部全景 東から S B 01 東から

SD02 東から

写真図版12 出土遺物

包含層出土土器(10)

包含層出土石器(S1)

第1章 山田地区遺跡

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置

山田地区遺跡(大歳遺跡・宇和田遺跡・七反田遺跡)は、兵庫県淡路市山田に所在する。淡路市は、淡路島の北部に位置し(第1図)、2005年4月1日に、淡路町・北淡町・東浦町・津名町・一宮町の5町が合併してできた市である。市域の南側は洲本市と接し、北側は明石海峡を挟んで神戸市・明石市と境をなしている。また西側は播磨灘に、東側は大阪湾に面している。市域の面積は184.21k㎡に及び、人口は4900人(平成20年7月現在)である。

山田地区遺跡は旧一宮町に所在し、淡路市のなかでも南西部に位置する(第2図)。淡路島のなかでは、西海岸のほぼ中央部にあたる。西側は播磨灘(瀬戸内海)に面し、北側から南側にかけては丘陵地帯となっている。旧町域の面積は40.24k㎡である。昭和56年10月における人口は10534人であった。

かつて律令時代には津名郡に配されており、



第1図 淡路市の位置

その郡衙が、後述するように現在の郡家付近にあったと推定されており、津名郡の中心地であった。旧一宮町多賀に淡路国一ノ宮の伊弉諾神宮があり、これが、当時の町名の由来である。現在では、農業・漁業・線香製造業が主要な産業で、特に線香の生産は日本一で、全国の約7割を占めるほどである。そしてこれが、淡路島の特産品の一つとなっている。

さらに、旧一宮町は、交通の要衝としても重要な位置を占めている。旧一宮町郡家において、淡路島の西浦を海沿いに延びるルートと、内陸部にのびるルートの結節点となっている。これは少なくとも江戸時代まで遡るもので、江戸時代にはこの郡家と南あわじ市国衙(旧三原町)を結ぶ街道が、旧一宮町の中央部を南北方向にのびていた(第38図)。この街道が律令時代まで遡るという説もある。また、江戸時代に江井に徳島藩邸が設けられたことから、海上交通に関しても重要な位置を占めていた。

そして、この街道沿いに山田地区遺跡がある。郡家からほぼ直線的に約5㎞内陸部南西方向に入った地点にあたる。このように、山田地区遺跡の所在する山田地区は、旧一宮町のなかでも南部に位置する。つまり、山田地区遺跡は淡路市の南端部に位置し、南側は洲本市五色町(旧津名郡五色町:平成18年2月に洲本市と合併)と接している。

当初、一宮町は、昭和30年に津名郡尾崎村・郡家町・多賀村・江井町が合併してできた町で、遺跡が所在する山田村は昭和31年と1年遅れで、一宮町に編入されている。当地区は農業を基盤とし、稲作とみかん栽培が盛んである。ただし、平地はわずかであるため、当地は顕著な棚田が形成されていた。



第2図 旧一宮町の位置

2. 地形的環境

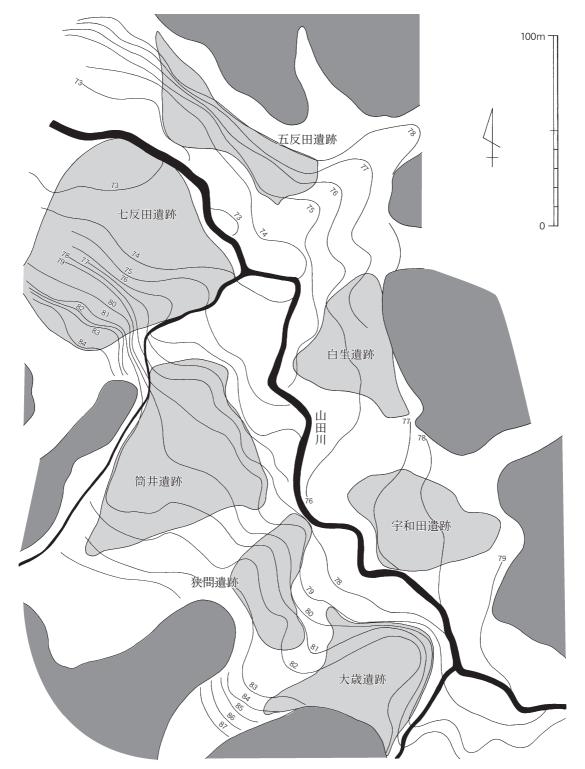
淡路島の地形は、北部・中部・南部と大きく3地区に分けることができる。北部は花崗岩から構成される山地が北東-南西方向にのび、その北西側は活断層があり、その断層崖の前縁には丘陵と段丘が分布している。中部は、花崗岩からなる先山(標高448m)を中心に丘陵が発達している。南部は、中央構造線の北側に沿って和泉層群から構成される諭鶴羽山地が発達している(1)。

山田地区遺跡の所在する旧一宮町は、上記の中部に位置し、遺跡周辺は丘陵が顕著に発達した地域である。特に遺跡周辺は標高250m以下の低丘陵からなる。丘陵のなかでも、やや高い箇所は花崗岩類からなり、それ以外は大阪層群から構成されている^②。そして、この丘陵地帯にはいくつかの小河川があり、これら小河川を中心に多くの小谷及び谷底平野が形成されている。ちなみに、当地は瀬戸内気候にあたるため降水量が少なく、これら小谷・谷底平野の多くは枯谷である。このため、旧一宮町内には6000を超える灌漑用ため池が造られている。

旧一宮町内に多数存在する谷底平野の一つが、山田地区遺跡が所在する山田盆地である。詳細にみると、 山田盆地の南側から東側・北側にかけての丘陵は大阪層群からなり、西側から南西側にかけての丘陵は花 崗岩類からなる。

山田盆地は山田川を中心に、その上流部に形成された盆地である。南東から北西方向に開けた盆地で、その規模は300m×800mを測りその面積は約24kmである。山田川は、洲本市五色町中邑を源とする二級河川である。山田盆地を北流後盆地北部で西方に変え、大きく蛇行を繰り返し、高山・草香を経て播磨灘(淡路市明神)に注いでいる。河川長は4000mである。

大歳遺跡と七反田遺跡は山田川の左岸に、宇和田遺跡は右岸に分布している(第3図)。具体的には、大 歳遺跡・宇和田遺跡・七反田遺跡は、山田川に沿った平坦部から丘陵部への変換部に立地している。この 変換部は周囲よりはやや高く緩斜面となっている。



第3図 山田地区遺跡の立地

この立地を詳細に観察すると、宇和田遺跡は小扇状地に立地している。盆地を囲む丘陵部には多くの小谷が山田川に向って形成されている。この小谷から噴出した堆積により形成された小扇状地である。

一方、大歳遺跡と七反田遺跡は、丘陵部の延長、その二次堆積により形成された微高地上に立地している。両遺跡は、山田川沿いの低地とは明らかな標高差が認められ、一段高い段丘面に立地しているものと考えられる。

〔参考文献〕

- (1) 太田陽子・成瀬敏郎他編『日本の地形 6 近畿・中国・四国』東京大学出版会 2004
- (2) 高橋 浩・寒川 旭・水野清秀・服部 仁『洲本地域の地質』地質調査所 1992

第2節 歷史的環境

1. 周辺の遺跡

山田地区遺跡内には、周知された遺跡はわずかである。このような状況の中、近年、圃場整備に伴う事前調査で、いくつかの遺跡が明らかとなってきている。以下、これらの成果をもとに、山田地区における遺跡をまとめていくことにする。当地に周知されている遺跡は、北から、五反田遺跡・七反田遺跡・白生遺跡・宇和田遺跡・筒井遺跡・狭間遺跡・大歳遺跡・新堂遺跡・江口遺跡・湯谷遺跡の10遺跡である(第5図)。以下、各遺跡の概要は以下の通りである。

(1) 五反田遺跡

山田川右岸に位置する遺跡で、七反田遺跡の北東側、白生遺跡の北側に位置する。奈良時代から平安時代前期にかけての掘立柱建物跡と溝状遺構、鎌倉時代前半の掘立柱建物跡・柱穴・溝状遺構が調査で明らかとなっている。奈良時代から平安時代前期にかけての遺物として、緑釉陶器の小片が出土している。また、当該期の焼塩壺の小片も出土している。

(2) 七反田遺跡

山田川左岸に位置する遺跡で、筒井遺跡の北側、五反田遺跡の南西側に位置する。調査では明確な遺構は検出されなかったが、弥生時代後期の土器が出土している。この他、黒色土器や瓦器なども出土している。

(3) 白生遺跡

山田川右岸に位置する遺跡で、宇和田遺跡の北側・五反田遺跡の南側に位置する。鎌倉時代前半の掘立 柱建物跡が検出されている。この他、縄文時代の楔形石器・削器や、弥生時代後期の土器、奈良時代の須 恵器・土師器なども出土している。

(4) 宇和田遺跡

山田川右岸に位置する遺跡で、大歳遺跡の北東側・白生遺跡の南側に位置する。鎌倉時代前半の掘立柱 建物跡・柱穴・溝、室町時代の土坑・溝状遺構、江戸時代の埋め桶などが検出されている。

(5) 筒井遺跡

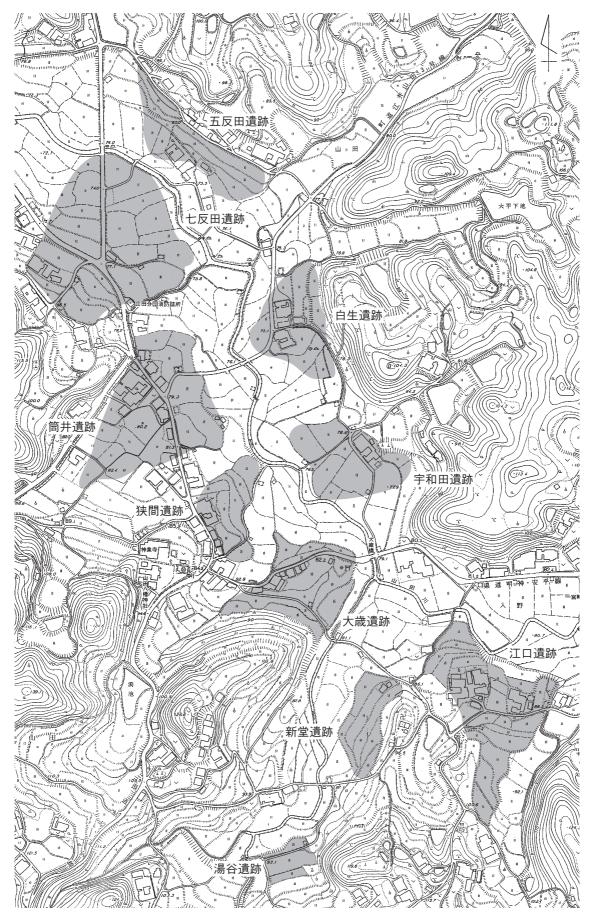
山田川左岸に位置する遺跡で、七反田遺跡の 南側、狭間遺跡の北側に位置する。鎌倉時代前 半の掘立柱建物群・柱穴・土坑・溝状遺構や室 町時代の溝状遺構が検出されている。この他、 江戸時代の青花や織部焼片なども出土している。

(6) 狭間遺跡

山田川左岸に位置する遺跡で、筒井遺跡の南 側、大歳遺跡の北側に位置する。遺構としては



第4図 山田地区遺跡近景(南西から)



第5図 山田地区遺跡

第1章 山田地区遺跡

室地時代前半の溝状遺構に限られる。他に、縄文時代の石鏃、奈良時代の須恵器・焼塩壺などが出土している。

(7) 大歳遺跡

山田川左岸に位置する遺跡で、狭間遺跡の南側、宇和田遺跡の南西側に位置する。平安時代の掘立柱建物跡や鎌倉時代前半の掘立柱建物跡・柱穴が検出されている。この他、弥生時代の石鏃・石錐なども出土している。

(8) 新堂遺跡

山田川左岸に位置する遺跡で、江口遺跡の西側に位置する。中世の柱穴・溝・土坑が検出されている。 中世の土師器・瓦器・須恵器・青磁等が出土している。

(9) 江口遺跡

山田川左岸に位置する遺跡で、新堂遺跡の東側に位置する。中世の掘立柱建物跡・柱穴・溝・土坑が検出されている。

(10) 湯谷遺跡

山田川左岸に位置する遺跡で、山田地区遺跡の南西部に位置する。新堂遺跡の南西側に位置する。中世の柱穴と溝を検出している。

(註)

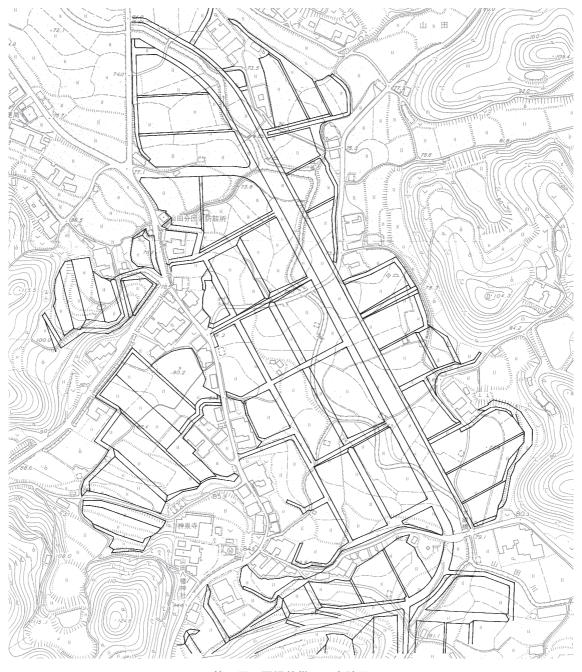
山田清朝・伊藤宏幸『山田地区遺跡 I -経営体育成基盤整備事業 山田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 I -』兵庫県教育委員会・淡路市教育委員会 2009

足立敬介『山田地区遺跡群Ⅱ - 経営体育成基盤整備事業 山田地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ - 』 淡路市教育委員会 2009

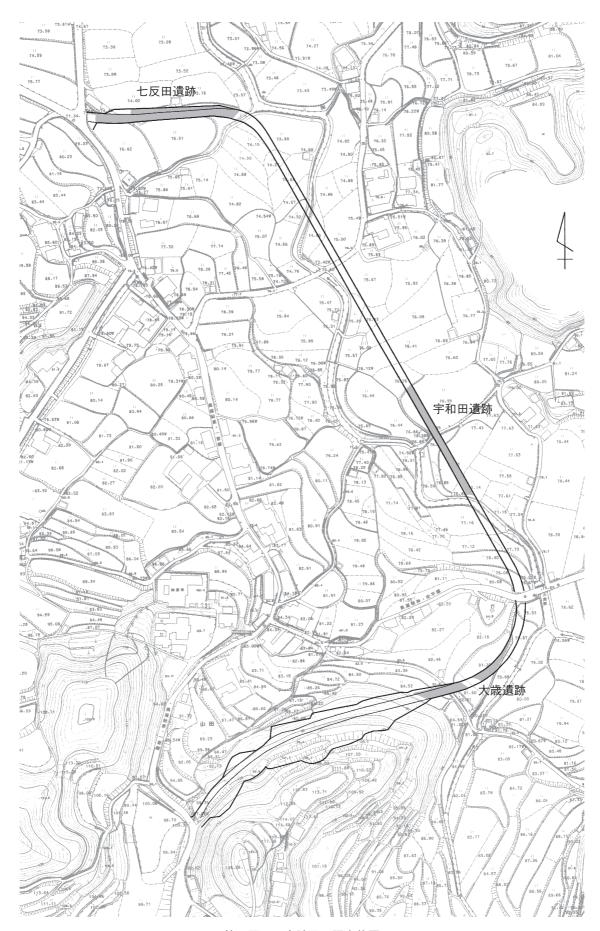
第2章 調査の経緯

第1節 調査の起因

調査地となった淡路市山田は、洲本市鮎原と淡路市江井を結ぶ県道鮎原江井線と淡路市明神と洲本市安 乎を結ぶ県道明神安乎線が交差し、内陸交通の要衝となっている。しかし、上記の県道は山田集落内にお いては、大変狭小で車両同士の対面が困難な状況にあった。一方、集落周囲に広がる水田地帯においては、 県営圃場整備が計画されていた。そこで、圃場整備と一帯となって、集落を迂回する県道を建設すること となった(第6図)。県道は、集落の北側から東側を山田川に沿うように迂回し、集落の南側で旧の県道に 繋がる計画である(第7図)。



第6図 圃場整備と工事計画



第7図 工事計画と調査位置

第2節 確認調查

今回の調査は、(一)鮎原江井線道路改良・(一)明神安平線道路改良事業に伴い実施した発掘調査である。 上記事業は、経営体育成基盤整備事業(ほ場整備事業)山田地区と一連の事業である。当該事業に伴う分 布調査・確認調査の結果、事業予定地には宇和田遺跡・大歳遺跡・七反田遺跡の3遺跡が存在することが 明らかとなった。このため、洲本土木事務所からの依頼により、本発掘調査を実施することとなった。

当地区においては、経営体育成基盤整備事業(ほ場整備事業)山田地区に伴い確認調査が実施されている(第8図)。当事業は、上記事業と一連のものであることから、上記の確認調査の結果に基づき、埋蔵文化財の有無の判断を行なった。確認調査は、2次にわたり、一宮町教育委員会(現淡路市教育委員会)により行なわれている。各確認調査の概要は、以下の通りである。

第1次確認調査(平成15年度)

調査主体:一宮町教育委員会

調査期間:平成15年10月14日~平成15年12月4日

平成16年3月19日 • 23日

調查担当:足立敬介(津名郡町村会 埋蔵文化財調查専門職員)

調査面積:768㎡(192箇所)

調査概要:山田川の両岸を中心として、2×2mの調査坑192箇所を設定し、遺構・遺物の状況を確認することを目的とした調査を実施した。その結果、山田川の両岸を中心として、弥生時代から中世に至る時期の遺物包含層や遺構の存在を確認した。

第2次確認調査(平成16年度)

調査主体:一宮町教育委員会

調査期間:平成16年10月7日~平成16年10月29日

調查担当:足立敬介(津名郡町村会 埋蔵文化財調查専門職員)

調査面積:184m²(42箇所)

調査概要:第1次調査で実施し得なかった範囲を対象として、2×2mの調査坑42箇所を設定し、実施 した。その結果、中世の遺物包含層及び当該期の柱穴などを検出した。中世城館跡である山 田城に近く、関連する遺構の存在が想定された。



第8図 確認調査位置図

第3節 本発掘調査

1. 概要

本発掘調査は、前節の確認調査の結果を受け、平成18年度に実施した。調査は、大歳遺跡→宇和田遺跡 →七反田遺跡の順に進めていった。

また、遺構検出後、ヘリコプターにより全景写真の撮影を、大歳遺跡と宇和田遺跡については平成18年 11月28日に、七反田遺跡については同年12月20日に、実施した。そして、この撮影をもとに調査成果の図 化をおこなった。また、調査と平行して、現場事務所内にて、出土遺物の水洗を行った。

上記の調査と合わせて、調査が一段落した12月23日に、一般市民を対象とした現地説明会を実施した。

2. 調査概要

宇和田遺跡(遺跡調査番号 2006085)

調査期間:平成18年10月16日~11月29日

調査面積:563 m²

概 要:山田川の西側に隣接する地区を調査対象とした。圃場整備に伴う調査地に隣接する地区であ

る。調査終了後の11月28日に空中写真撮影を行なった。

大歳遺跡(遺跡調査番号 2006084)

調査期間:平成18年10月16日~12月25日

調査面積: 401 m²

概 要: A地区(246㎡)とB地区(155㎡)の 2地区からなる。A地区は、丘陵 斜面にあたり、道路建設に伴い削 平される箇所である。B地区は、 以前水田であった箇所である。調 査終了後の11月28日にA地区の、 12月20日にB地区の空中写真撮影

を行なった。

第9図 調査前の大歳遺跡 B地区

七反田遺跡(遺跡調査番号 2006086)

調査期間:平成18年11月14日~12月25日

調査面積:896㎡

概 要:今回報告する3遺跡のなかで最も 広い範囲を調査対象とした。調査

> を行なった。また、12月23日には、 地元市民を対象とした地元説明会

> 終了後の12月20日に空中写真撮影

を開催した。



第10図 七反田遺跡の調査

3. 調査体制

調査体制は、以下の通りである。

調 查 員:山田清朝・鐵 英記(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所: 当時)

現場事務員: 庄司博代



第11図 竣工後の宇和田遺跡

第12図 竣工後の大歳遺跡

第4節 整理作業

平成21年度の1箇年で、全ての作業を兵庫県立考古博物館にて実施した。また、大歳遺跡出土石帯に関連して、南あわじ市国分遺跡出土石帯について、同教育委員会の坂口弘貢・定松佳重の御好意により、実見させていただいた。

整理体制は、以下の通りである。

調 查 員:兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

山田清朝

整理担当職員:兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部整理保存班

整 理 担 当:菱田淳子

嘱 託 員:島田留里・川村由紀

第3章 調査の成果

第1節 大歳遺跡

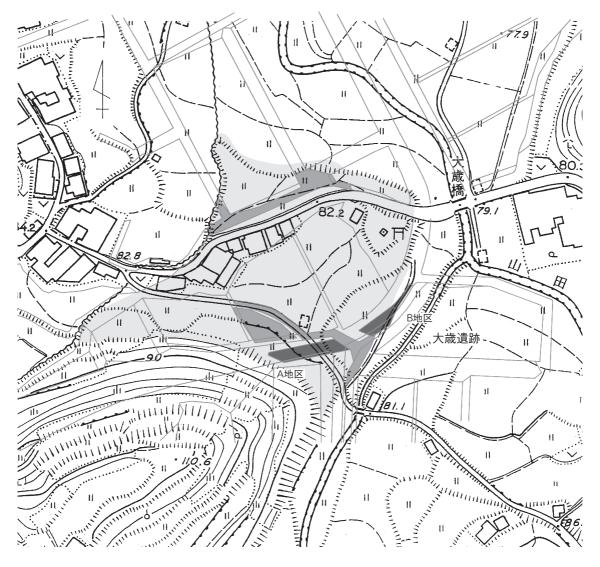
1. 遺跡の位置

山田盆地の南部に位置する。南側が丘陵となり、その丘陵北側斜面を中心に拡がっている。山田盆地を貫く山田川の左岸にあたる。挟間遺跡の南側、宇和田遺跡の南西側に位置する。

2. A地区の調査

(1) 概要

調査地点は本来丘陵の北側斜面にあたり(第13図)、遺構面は西から東にかけて傾斜している。西端部の標高が84.20m、東端部の標高が80.70mと、約3.5mの標高差が認められる。また、途中2箇所で水田造成に伴う段差が認められる。

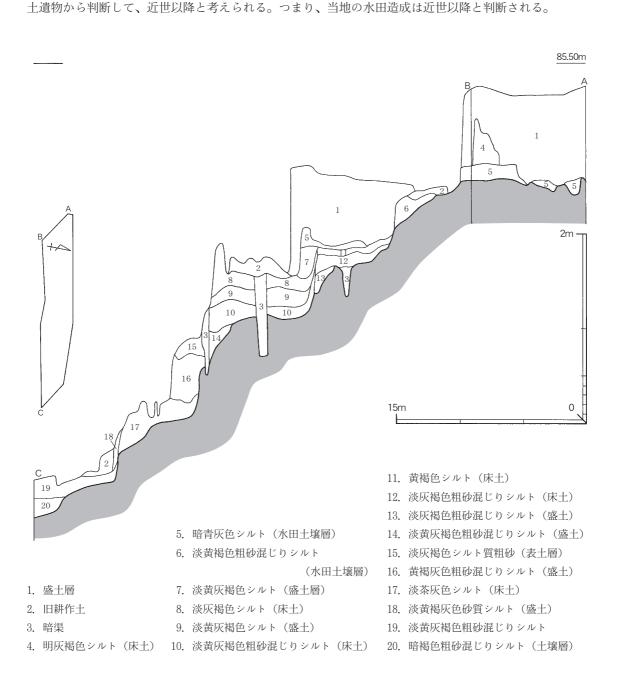


第13図 大歳遺跡調査位置図

(2) 基本十層(第14図)

A地区は、丘陵斜面にあり、調査前までは水田が造成されており、棚田が形成されていた。ただし、調査時においては、圃場整備の進行に伴い、耕作土は基本的に除去された状態であった。このため、第14図には第2層を除いては、この層が表現されていない。

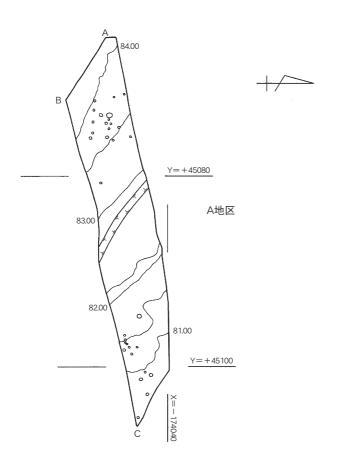
調査地は傾斜地にあたり、この丘陵斜面を切り盛りすることにより、水田が造成されている。このため、水田造成前の旧表土層は基本的には認められず、調査地で認められた層のほとんどは、盛土層・床土層・水田土壌層の第3層である。唯一、第20層に関しては、土壌化した層で、旧表土層に近いものと考えられる。以上から、当地区においては、いわゆる顕著な遺物包含層は認められず、上記の盛土層・床土層・水田土壌層から、土器がわずかに出土している程度である。また、これらの層については、その層相および出

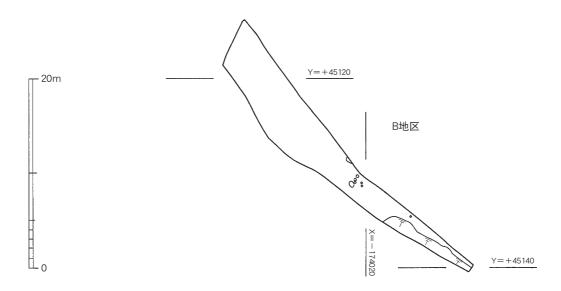


第14図 大歳遺跡A地区基本土層図

(3) 調査の成果

検出した遺構は柱穴のみであり、調査区の西端と東端に偏って計30数基を検出した(第15図)。ただし、 これらの柱穴群から建物を復元することはできなかった。





第15図 大歳遺跡平面図

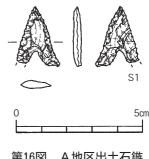
(4) 出土遺物

土器と石器が出土している。いずれも遺構に伴うものではなく、整地層・ 耕作土層・床土層からの出土である。

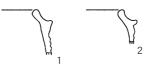
土器は、土師器の堝(1・2)と瓦器椀(3)が出土している(第17図)。堝 は同タイプに分類できるもので、口縁部外面が突帯状をなす。

瓦器椀は、和泉型に分類されるもので、内面にわずかに暗文が観察でき る。外面には暗文は認められない。全体的に炭素の吸着は不十分である。 石器は、チャート製打製石鏃が1点(S1)出土している(第16図)。凹基

式に分類されるものであるが、逆刺片側の一端を欠く。長さ2.4cm、基部 幅1.7cm、最大厚3mm、重さ0.8gを測る。



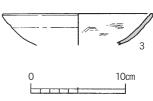
第16図 A地区出土石鏃



3. B地区の調査

(1) 概要

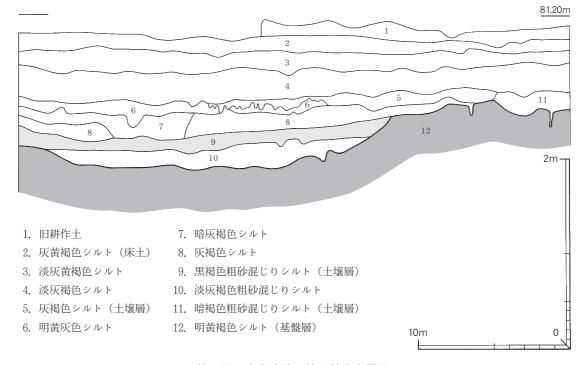
A地区の北東部に位置する。A地区とは立地を大きく異にし、緩やかな 扇状地状斜面に立地する。



第17図 A地区出土土器

(2) 基本十層(第18図)

B地区は、A地区とは異なり、比較的平坦地に立地する。ただし、わずかに南側へ落ち込む傾向がある。 このため、当該箇所が、浅い谷状を呈し、全体的に深くなっており、この堆積土(第9層)が顕著に土壌化 し、かつ当該層から多くの遺物が出土している。この下の第10層は第9層と同時に堆積した層で、土壌化 があまり及んでいない層と考えられ、遺物の出土量もわずかである。第9層より上の層は、人為的に埋め られた層で、耕土→床土化を繰り返したものと考えられる。



第18図 大歳遺跡 B 地区基本土層図

(3) 調査の成果

遺構面は調査区の西端部から東部にかけてわずかに傾斜しているが、A地区ほど顕著ではない。調査区の東側で柱穴を8穴検出したが、調査区の幅が狭いこともあり、建物跡と考えられる並びは検出できなかった。西半部では遺構は全く検出されなかった。

(4) 出土遺物

土器と石器・石製品が出土している。いずれも包含層からの出土で、遺構に伴う遺物は認められない。 土器は、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・白磁・青磁が出土している(第19図)。

土師器は、皿・托・椀・甕・羽釜が出土している。皿は、6 個体 $(4 \sim 9)$ 出土している。9 を除いては手づくね成形によるもので、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。また、底部内面は仕上げナデが加えられている。9 は轆轤成形によるものと考えられるが、底部は未調整である。

托は10の1個体である。轆轤成形によるもので、底部は回転へラ切りにより切り離され、ナデ調整により仕上げられている。体部~口縁部内外面は回転ナデ調整により仕上げられている。

椀は11~14の4個体出土している。大きく、底部が輪高台をなすタイプ(12)と平高台をなすタイプ(13) に分類できる。ただし、11と14については、細分は困難である。12は、高さ8 mmの断面逆三角形の高台が貼り付けられている。体部は指オサエとナデ調整により仕上げられ、最後に口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。13は、明確な平高台をなすもので、回転へラ切りにより切り離されている。体部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。11と14も後者に分類される可能性が高い。特に14の轆轤成形痕が顕著である。

甕は、15の口縁部の小片が出土している。く字形に屈曲するもので、内外面ともハケ調整が施され、最後に口縁部外面が横ナデ調整により仕上げられている。

羽釜は16~18の3個体出土している。いずれも同タイプに分類されるもので、口縁部下に断面方形もしくは台形の鍔が貼り付けられている。鍔は指オサエにより成形され、口縁部と合わせて、横ナデ調整により仕上げられている。体部内面はナデ調整、外面はハケ調整により仕上げられている。全体的に、砂粒を多く含む、粗い胎土である。

須恵器は、壺・捏鉢・椀が出土している。

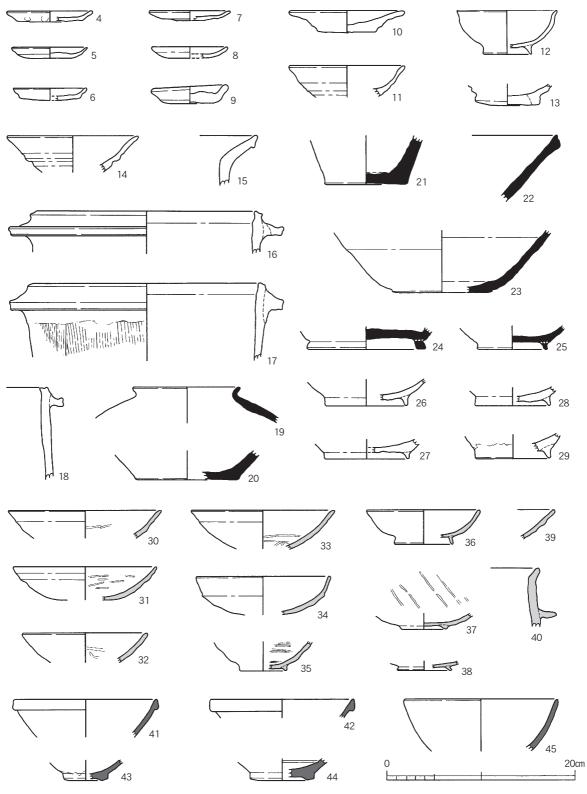
壺は、19・21・24の3個体である。19は、大きく開く肩部に対して、口縁部がわずかに外方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。21は、双耳壺の底部片で、糸切りにより切り離されている。24は、輪高台を有する底部片で、内面に灰かぶりが認められる。

捏鉢は、底部片(20・23)と口縁部片(22)が出土している。底部片は、いずれも回転糸切りにより切り離されている。

椀は、25の1個体である。底部に輪高台が貼り付けられて、回転ナデ調整により仕上げられている。

黒色土器は、椀が4個体 $(26\sim29)$ 出土している。いずれも内面のみ黒化されたA類に分類されるものである。4個体とも、底部は輪高台が貼り付けられている。外面は指オサエとナデ調整後、横ナデ調整により仕上げられている。内面は、いずれも磨滅のため詳細な調整は観察できない。わずかに26の内面にヘラミガキの痕跡が観察できる。

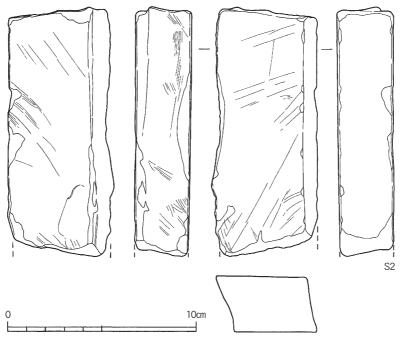
瓦器は、椀が10個体(30~39)出土している。いずれも和泉型瓦器に分類されるもので、外面は指オサエ成形後、口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。全体的に炭素の吸着が不十分である。暗文は、内



第19図 大歳遺跡 B 地区出土土器

面のみに認められ、外面には施されていない。暗文が観察できる個体については、いずれも圏線状に施され、35を除いては、粗く施されている。35については、他より密に施されている。また、高台断面が逆台形をなし、体部の立ち上がりから法量的に深いなど、他より古い要素が認められる。また、38についても、高台の特徴が古い傾向を示している。

瓦質土器は40の1個体が出土している。羽釜と考えられ、鍔から口縁部の小片が出土している。幅2cm



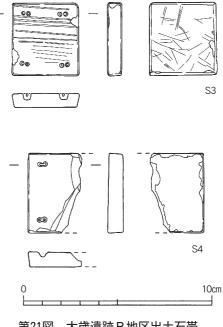
第20図 大歳遺跡 B 地区出土砥石

の鍔が貼り付けられ、横ナデ調整により仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。炭 素の吸着は不十分である。

白磁は、41~44の4個体出土しているが、いずれもⅣ類に分類される碗である。青磁は、45の1個体が 出土している。残存する範囲においては無文で、全面に釉が掛けられている。

石製品は、砥石と石帯(巡方)が出土している(第20図・第21図)。砥石はS2の1点である。ほぼ完存し、 長方体の石材の小口面を除く3面が使用されている。長さ13.1cm、幅5.5cmを測り、重さは376.7gであ

巡方は、2点(S3・S4)出土している。S3は、ほぼ 完存し、その規模は3.85cm×3.55cmである。また、厚み は7.5mm、重量は23.9gである。白色系の石材を加工した もので、表面と側面は研磨され、光沢を持つ。裏面は仕上 げが行なわれず、筋状の沈線が数条認められる。4隅には 潜り穴が穿たれている。断面U字形をなし、その径は2mm ~2.5mmである。S4も、完存しないが、S3と同様の特 徴を示すものである。白色系の石材を加工したもので、表 面と側面は研磨され、光沢を持つ。残存する一辺の長さは 4.20cmを測り、S3よりやや大型である。厚さは8mm、 重さは19.2gである。潜り穴が2箇所で残存し、その径は 2 mm~3 mmである。



第21図 大歳遺跡 B地区出土石帯

第2節 宇和田遺跡

1. 遺跡の位置

山田盆地の東側の小扇状地に立地する。山田川の右岸にあたる(第22図)。白生遺跡の南側、大歳遺跡の 北東側に位置する。



第22図 宇和田遺跡調査位置図

2. 調査の成果

(1) 概要

検出した遺構は柱穴・土坑・溝状遺構に限られる。これらの遺構は、調査区北半部と中央部に集中する傾向が認められ、南側では明治時代以降と考えられる土坑1基を検出したに限られる(第23図)。

(2) 基本土層

調査区周囲は圃場整備のため、耕作土は取り除かれていた。このため、当遺跡の基本土層は、上から、 床土層・基盤層の2層に限られる。このため、顕著な遺物包含層は認められなかった。

床土層は、灰褐色粗砂からなり、20cmから30cmの厚さが認められた。微視的に観察すると、さらに数層に分層することが可能である。基盤層は、灰褐色シルト混じり粗砂~細砂からなり、当層の上面で遺構

を検出した。基盤層上面の標高は、北端部で76.48m、南端部で76.24mと、南側へ傾斜している。特に、調査区内の大半はほぼ平坦で、南端部付近で急激に標高が低くなっている。

(3) 遺構と遺物

I:柱穴

北半部で数穴検出したが、建物を復元することはできなかった。また、柱穴内からは土器が出土していないため、時期の特定も困難である。

Ⅱ:土坑

1基検出している。

S K 01

調査区中央部に位置する(第23図)。 S D03の南側、S D04の北側に位置する。他の遺構とは切り合い関係になく、完存する。平面形は楕円形をなし、その規模は1.25m×1.25mである。 横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは54cmである。

遺物は土師器の小皿が1点(1)出土している。轆轤成形によるもので、底部は回転糸切りにより切り離されている(第27図)。

Ⅲ:溝

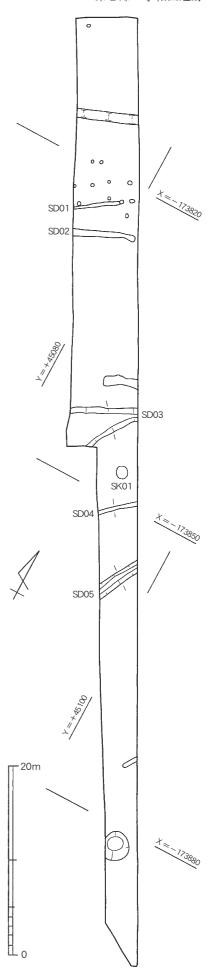
5条検出している。

S D01

調査区北部に位置する(第23図)。北東-南西方向に延びる 溝で、北東端は調査区内で収束し、南西端は調査区外へ伸び ている。検出した長さは5.40mで、検出面における幅は40cm を測る。横断面はU字形をなし、最深部における検出面から の深さは、8 cmである。

S D 02

調査区北部、S D01の東側に位置する(第23図)。北東-南西方向に延びる溝で、北東端は調査区内で収束し、南西端は調査区外へ伸びている。検出した長さは6.60mで、検出面における幅は57cmを測る。横断面は皿形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。埋土は、2層からなるが、人為的に埋められている。



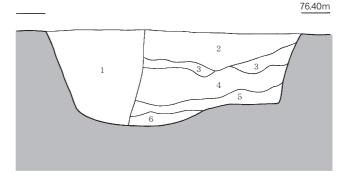
第23図 宇和田遺跡平面図

S D 03

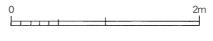
調査区中央部に位置する(第23図)。北東-南西方向に延びる溝で、両端とも調査区外 に拡がっている。平面的には両端で検出幅 が大きく異なるが、当遺構の大半が用水路 の影響を受けていることに起因するものと 考えられる。

検出長は7.40mで、中央部における検出 幅は2.80mを測る。横断面は逆台形をなし、 最深部における検出面からの深さは1mを 測る(第24図)。

埋土は、5層からなる。最下層の第6層 は自然に堆積した層で、腐植物が多く含ま



- 1. 用水路
- 4. 明黄灰色~暗青灰色シルト
- 2. 褐灰色粗砂
- 5. 暗黄灰色粗砂
- 3. 明黄灰色細砂混じり粗砂
- 6. 暗黒褐色シルト



第24図 S D 03断面

れていた。他の層については、その層相から人為的に埋められたものと判断される。

溝内からは、土師器と陶器が出土している(第27図)。土師器は、小皿と焙烙が出土している。

小皿は、2と3の2個体で、いずれも轆轤成形によるものである。底部はいずれも回転糸切りにより切り離されている。他は回転ナデ調整により仕上げられ、底部内面には仕上げナデが認められる。

焙烙は、 $4 \sim 7$ の 4 個体が出土している。いずれも、体部内外面がナデ調整、体部から口縁部にかけての変換部内外面が指オサエとナデ調整、口縁部内外面が横ナデ調整により仕上げられている。

陶器は、堺・明石産と考えられる擂鉢が 2 個体 $(8 \cdot 9)$ 出土している。内面には 8 本を 1 単位とする卸し目が施されている。

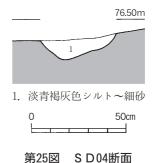
これらの出土遺物から、18世紀代に位置付けられる。

S D 04

調査区南半部、SD03とSD05の中間に位置する(第23図)。北東-南西方向にほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外に伸びている。検出した長さは4.10mで、検出面における幅は40cmを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである(第25図)。

埋土は淡青褐灰色シルト〜細砂1層からなり、その層相から判断して、 人為的に埋められたものと考えられる。

遺構内から土器は出土しておらず、時期の特定は困難である。



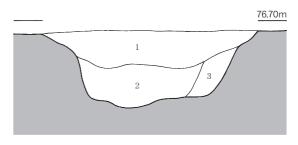
S D 05

調査区南半部に位置する(第23図)。北東-南西方向にほぼ直線的にのびる溝で、両端とも調査区外に伸びている。検出した長さは5.10mで、検出面における幅は1.11mを測る。横断面は逆台形をなし、最深部における検出面からの深さは40cmである(第26図)。埋土は3層からなり、1層と2層は人為的埋め戻されている。

遺構内からは、遺物は全く出土していない。埋土の特徴から、江戸時代後期と考えられる。

IV: その他

包含層から錠前が1点(M1)出土している(第28図)。ほぼ完存するが、牝金具の弦通し孔部と牡金具の弦部先端を欠く。牝金具は、平面形が逆凸形をなすもので、その幅は9.40cm、幅2.05cmを測る。また、その厚みは5mmである。牡金具の弦部は断面が径6mの円形で、7.40cm残存する。弦受け部と施錠部の境は溝状に繰り込まれ、それぞれの長さは、1.10cm・7.50cmである。また、牝金具外面の一部に銅の付着が認められる。



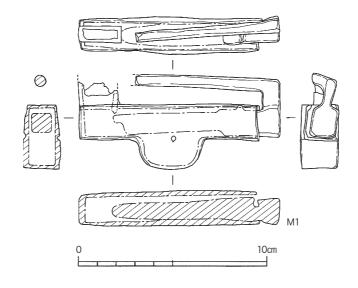
- 1. 淡褐灰色粗砂混じりシルト
- 2. 淡褐灰色粗砂混じりシルト
- 3. 淡褐灰色シルト混じり粗砂~細砂



第26図 S D 05断面

20cm

第27図 宇和田遺跡出土土器



第28図 宇和田遺跡出土錠前

第3節 七反田遺跡

1. 遺跡の位置

山田盆地の北部、山田側の左岸に位置する。五反 田遺跡の西側、筒井遺跡の北側に位置する。

2. 調査の成果

(1) 概要(第33図)

検出した遺構は掘立柱建物跡・柱穴・溝状遺構に限られる。調査地は西側から東側にかけて傾斜しているため、東端部で検出されたのは溝状遺構に限られ、掘立柱建物跡と柱穴は中央部より西側に限られ



第29図 竣工後の七反田遺跡(東から)

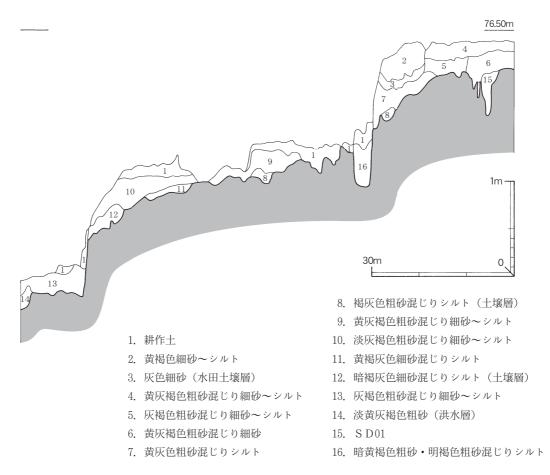
る。上記以外に、土坑状の遺構も検出しているが、土器が出土せず、時期の特定はできなかった。



第30図 七反田遺跡調査位置図

(2) 基本十層(第31図)

本遺跡においても、圃場整備工事後に調査を行ったため、耕作土はほとんど残っていなかった。このため、第31図には耕作土はほとんど表現されていない。調査地は傾斜地にあるため、西側から東側にかけて傾斜しており、一部水田造成のため、削平を受けていた。特に、調査区東端部は、急激に落ち込み、洪水砂が堆積していた(第14層)。他の箇所については、全体的に水田土壌→床土が繰返された層からなる。一部、旧表土と考えられる顕著に土壌化された層(第8層・12層)が認められた。基盤層は、明黄灰色シルトからなる。なお、各層中に認められる粗砂は、いずれも花崗岩の培乱化したものである。



第31図 七反田遺跡基本土層図

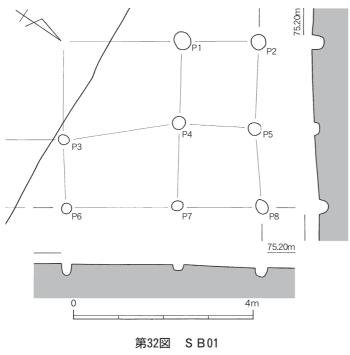
(3) 遺構と遺物

I:掘立柱建物跡

1棟(SB01)を検出した。調査区中央部に位置する(第33図)。総柱の建物と考えられるが、一部は調査区外へ拡がっている。梁行方向(P2-P8)は2間で、桁行方向(P6-P8)で2間分検出している(第32図)。梁行方向の規模は3.65mを測り、桁行方向P6-P8間の距離は4.35mである。P2-P8を基準とした棟軸方向は、N33°30″Wを示している。柱穴の平面形は円形を基本とし、その規模は24cm~35cmを測り、検出面からの深さは12cm~25cmである。なお、柱痕は検出されなかった。

遺物は、P1より土師器の椀(8)が出土している(第37図)。轆轤成形によるもので、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

以上から、鎌倉時代に位置付けられる。



Ⅱ:柱穴

P 1

調査区西端部に位置する(第33図)。

瓦器椀が1点(9)出土している(第37図)。和泉型瓦器椀に分類されるもので、外面は指オサエにより成形後、口縁部が横ナデ調整により仕上げられている。底部には断面蒲鉾形の高台が貼り付けられている。高台高はわずか2.5mmである。全体的に磨滅が著しいが、内面にわずかに暗文が認められる。

P 2

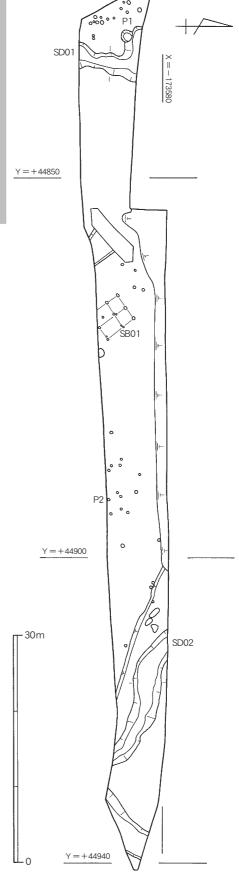
調査区中央部に位置する(第33図)。

土師器の椀もしくは杯の底部片が出土している。底部の 形態から、11世紀後半の特徴を示している。

Ⅲ:溝

S D01

調査区西端部に位置する(第33図)。ほぼ南北方向に延びる溝で、両端とも調査区外へ伸びている。検出した長さは7.50mである。平面形は、北側へ傾斜しているためその形状は一定ではなく、中央部における検出面の幅は2.40mを測る。後述するように再掘削が行われた結果、中央部が土手状に盛り上がり、その両側が断面逆台形状に掘り込まれ



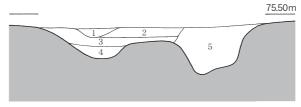
第33図 七反田遺跡平面図

ている。最深部における検出面からの深さは、 52cmである。地形的に北側へ傾斜しており、 当溝も北側へ流れていた。

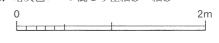
埋土は5層からなる(第34図)が、2回にわたり掘削が行われている。つまり、まず5層下面のラインまで掘削され、これが洪水により埋没後、4層下面まで再掘削されている。4層と3層が洪水により埋没後、3層が土壌化している。その後、1層と2層が人為的に埋められている。

遺物は、須恵器の杯Aの底部片と土師器の小 片が出土している。須恵器については小片のた め図化できなかった。土師器については器種の 特定も困難である。

以上の出土土器から、奈良時代に位置付けられる。



- 1. 暗黄褐色シルト混じり暗灰色シルト質極細砂
- 2. 暗灰色シルト質極細砂
- 3. 黒灰色シルト (土壌層)
- 4. 暗灰色シルト混じり細砂
- 5. 暗灰色シルト混じり極細砂~細砂



第34図 S D01断面

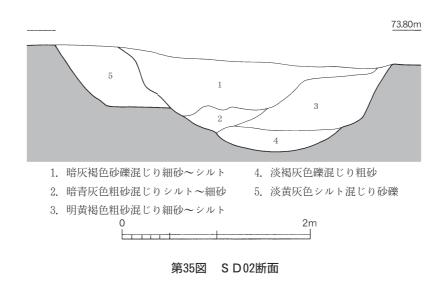
S D 02

調査区東部に位置する(第33図)。東西方向に蛇行気味にのびる溝で、両端とも調査区外へ伸びている。 検出した長さは18.00mで、検出面における幅は3.56mを測り、横断面は逆台形をなす。最深部における 検出面からの深さは、1.08mを測る。また、底部のレベルから、東側へ流れていたものと判断される。

埋土は5層からなる(第35図)が、大きく3回にわたり掘削が行われている。まず、5層下面まで掘削されている。これが洪水により埋没後、4層下面まで再掘削されている。4層と3層が洪水により埋没後、再び2層下面のラインまで掘削されている。最後に1層と2層が堆積し、完全に埋没している。

遺物は、須恵器の壺が1点(4)出土している(第37図)。双耳壺の底部と考えられ、底部はナデ調整により仕上げられている。体部外面は下端が弱いヘラ削り、他は回転ナデ調整により仕上げられている。内面は全て回転ナデ調整により仕上げられている。また、底部内面には灰かぶりが認められる。

この他、須恵器の甕の体部片と土師器の甕の体部片が出土している。土師器の甕は、外面が叩き成形に



より仕上げられている。いずれも小片のため図化できなかった。 以上の出土土器から、平安時代に位置付けられる。

IV:包含層

土器と石器が出土している。

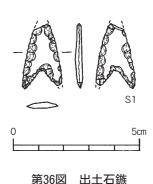
土器は、須恵器・黒色土器・備前焼が出土している(第37図)。

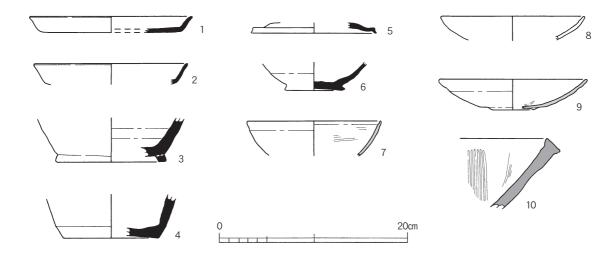
須恵器は、皿・壺・蓋・椀が出土している。皿は $1 \ge 2$ の2 個体で、1の底部は回転へラ削りにより仕上げられている。また、2の内外面には火襷痕が認められる。壺は、3の1 個体である。底部を中心に残存するが、特に内面は釉の付着が顕著である。蓋は、5の1 個体が出土している。杯Bの蓋と考えられ、口縁部は屈曲する。椀は東播系の椀が1 個体(6)が出土している。底部は平高台の痕跡を残し、回転糸切りにより切り離されている。

黒色土器は、7の椀1個体である。内面のみ黒化したA類に分類されるものである。内面にわずかに暗文の痕跡が認められる。体部外面は指オサエとナデ調整により、口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。口縁端部内面はわずかに沈線状をなす。

備前焼は、擂鉢の口縁部片(10)が出土している。口縁部に対して直交 する端面を有するタイプで、Ⅲ期に分類されるものである。

石器は、サヌカイト製の打製石鏃が1点(S1)出土している(第36図)。 凹基式に分類されるもので、先端と逆刺の一部を欠く。残存長2.55cm、 厚さ2.5mm、重さ0.8gを測る。





第37図 七反田遺跡出土土器

第4章 まとめ

以上、大歳遺跡・宇和田遺跡・七反田遺跡の3遺跡について、報告してきた。以下、3遺跡について簡単にまとめ、本報告のまとめとしたい。

大歳遺跡では、柱穴以外明確な遺構を検出することができず、出土遺物は包含層に限られる。平安時代以降の遺物が中心である。この中で特筆されるのが、石帯の出土である。石帯については、律令官人との関連を想起させるものである。2点とも、石帯の巡方としては大型の部類であり、高品質指向とされる白色系の石材が用いられ、光沢を有する。これらの特徴から、9世紀から10世紀にかけてに位置付けられるもので、当遺跡出土土器の時期と一致するものである。しかし、本遺跡の調査からは、以前の調査を含めて、石帯と関連するような遺構は検出されていない。

唯一考えられるのが、当遺跡の地理的位置である。正保三年(1645)完成の「正保の国絵図」に島内の 往還道が記されている(第38図)。ここに、往還道のひとつとして、郡家濱村(現淡路市郡家)と国ケ村 (現南あわじ市国衙)を結ぶ中街道(中通り)が記されており、この往還道が山田地区遺跡をと通過して いる。具体的には、淡路市郡家から同市柳沢を通り山田に至り、吉田村(旧五色町吉田:現洲本市吉田) に抜けている。このルートは、律令時代における淡路国府と津名郡郡衙をほぼ直線的に結ぶもので、この 時代まで遡る可能性を示すものである。

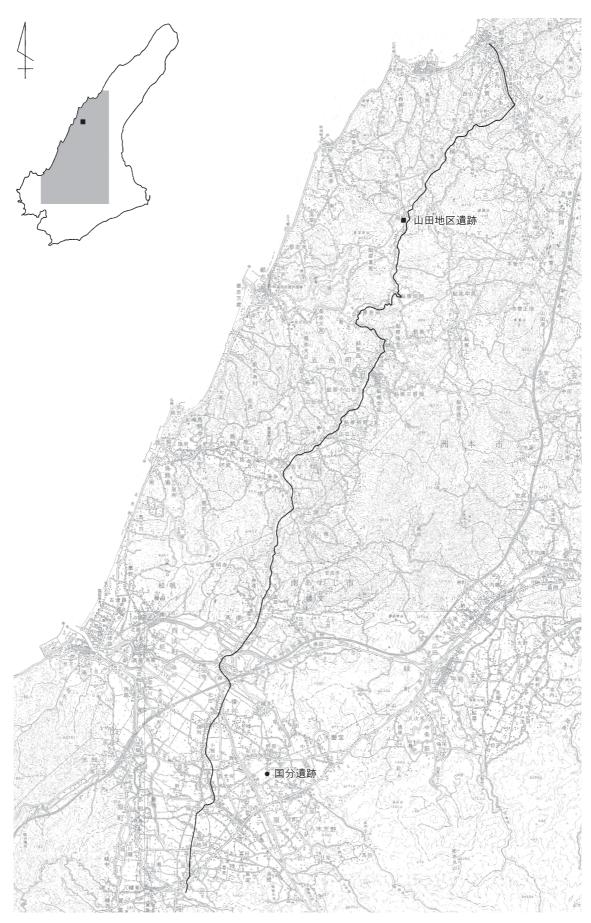
以上から、当地に律令期の何らかの施設があった可能性も考えられるのではないであろうか。

宇和田遺跡は、調査位置が遺跡の縁辺部に位置するため、江戸時代の土坑・溝状遺構が検出され、当該期の遺物が出土しているのみである。この中で注目されるが、錠前の出土である。時代的には古くはないが、数少ない出土例と位置付けることができる。

七反田遺跡遺跡では、奈良時代の溝・建物跡を検出した。当遺跡の調査地も、遺跡の北側縁辺部に位置するため、検出された遺構は限られている。地形環境からみて、調査地の南側に遺跡の中心があるものと考えられる。

〔参考文献〕

平尾政幸「平安京の石製銙具とその生産」『研究紀要』第7号 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2001 武田清市「近世の淡路往還」『歴史の道調査報告書 第六集 淡路往還(南海道)』兵庫県教育委員会 1996



第38図 江戸時代の往還道

出土土器観察表(1)

| 遺跡名 | No. | 地区名 | 遺構名 | 種別 | 器種 | 口径 (cm) | 器高 (cm) | 底径 (cm) | 残存状況 |
|------|-----|-----|-----|------|----|------------|------------|------------|---------------|
| 大歳遺跡 | 1 | A地区 | 包含層 | 土師器 | 堝 | | 4.80 | | 口縁部わずか |
| 大歳遺跡 | 2 | A地区 | 包含層 | 土師器 | 堝 | | 3.60 | | 口縁部わずか |
| 大歳遺跡 | 3 | A地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | 15.60 | 3.30 | | □縁部1/12 |
| 大歳遺跡 | 4 | B地区 | 包含層 | 土師器 | Ш | 8.80 | 1.15 | 6.70 | □縁部1/4強 |
| 大歳遺跡 | 5 | B地区 | 包含層 | 土師器 | Ш | 7.90 | 1.20 | 4.80 | □縁部1/6・底部1/2弱 |
| 大歳遺跡 | 6 | B地区 | 包含層 | 土師器 | Ш | 7.60 | 1.30 | 6.10 | □縁部~底部1/4強 |
| 大歳遺跡 | 7 | B地区 | 包含層 | 土師器 | Ш | 8.40 | 1.05 | 3.00 | □縁部1/5 |
| 大歳遺跡 | 8 | B地区 | 包含層 | 土師器 | Ш | 7.80 | 2.00 | 5.20 | □縁部1/2弱 |
| 大歳遺跡 | 9 | B地区 | 包含層 | 土師器 | Ш | 7.50 | 2.00 | 5.30 | □縁部1/2弱・底部4/5 |
| 大歳遺跡 | 10 | B地区 | 包含層 | 土師器 | 托 | 11.60 | 2.30 | 6.15 | □縁部1/7・底部1/2 |
| 大歳遺跡 | 11 | B地区 | 包含層 | 土師器 | 椀 | 12.00 | 3.30 | | □縁部1/7 |
| 大歳遺跡 | 12 | B地区 | 包含層 | 土師器 | 椀 | 10.40 | 4.65 | 5.10 | □縁部1/6~底部1/4 |
| 大歳遺跡 | 13 | B地区 | 包含層 | 土師器 | 椀 | | 2.20 | 6.85 | 底部5/6 |
| 大歳遺跡 | 14 | B地区 | 包含層 | 土師器 | 椀 | 13.60 | 3.80 | | □縁部1/4 |
| 大歳遺跡 | 15 | B地区 | 包含層 | 土師器 | 獲 | | 5.30 | | 口縁部わずか |
| 大歳遺跡 | 16 | B地区 | 包含層 | 土師器 | 羽釜 | 23.00 | 4.50 | | □縁部1/8 |
| 大歳遺跡 | 17 | B地区 | 包含層 | 土師器 | 羽釜 | 24.00 | 8.20 | | □縁部1/5 |
| 大歳遺跡 | 18 | B地区 | 包含層 | 土師器 | 羽釜 | | 9.80 | | 口縁部わずか |
| 大歳遺跡 | 19 | B地区 | 包含層 | 須恵器 | 壺 | 11.00 | 3.80 | | □縁部1/4強 |
| 大歳遺跡 | 20 | B地区 | 包含層 | 須恵器 | 捏鉢 | | 3.10 | 11.00 | 底部1/4弱 |
| 大歳遺跡 | 21 | B地区 | 包含層 | 須恵器 | 壺 | | 5.10 | 8.70 | 底部3/4 |
| 大歳遺跡 | 22 | B地区 | 包含層 | 須恵器 | 捏鉢 | | 7.00 | | 口縁部わずか |
| 大歳遺跡 | 23 | B地区 | 包含層 | 須恵器 | 捏鉢 | | 6.60 | 10.60 | 底部1/5 |
| 大歳遺跡 | 24 | B地区 | 包含層 | 須恵器 | 壺 | | 2.30 | 12.50 | 底部1/3 |
| 大歳遺跡 | 25 | B地区 | 包含層 | 須恵器 | 椀 | | 2.50 | 7.40 | 底部1/4弱 |
| 大歳遺跡 | 26 | B地区 | 包含層 | 黒色土器 | 椀 | | 2.80 | 8.80 | 底部1/3 |
| 大歳遺跡 | 27 | B地区 | 包含層 | 黒色土器 | 椀 | | 2.10 | 8.90 | 底部1/9 |
| 大歳遺跡 | 28 | B地区 | 包含層 | 黒色土器 | 椀 | | 2.00 | 8.00 | 底部1/5 |
| 大歳遺跡 | 29 | B地区 | 包含層 | 黒色土器 | 椀 | | 2.60 | 7.90 | 底部1/9 |
| 大歳遺跡 | 30 | B地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | 16.00 | 3.00 | | 口縁部1/4弱 |
| 大歳遺跡 | 31 | B地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | 15.00 | 3.50 | | 口縁部1/6 |
| 大歳遺跡 | 32 | B地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | 13.00 | 3.20 | | 口縁部1/6弱 |

| 色調 | 焼成 | 胎土 | 備考 | 挿図 | 図版 |
|-----------|------|----------------------------|--------------------|----|----|
| 橙~にぶい赤褐 | | 長石・チャート・石英・クサリレキ多 く含む | 外面煤付着 | 17 | |
| 橙 | | 長石・チャート・石英多く含む | 口縁部外面煤付着 | 17 | |
| 黄灰~にぶい黄褐 | | 雲母・長石多く含む | 炭素吸着不十分•暗 文観察不可 | 17 | |
| 浅黄橙~褐灰 | | クサリレキ・雲母含む | | 19 | |
| にぶい橙~褐灰 | | 微細な長石・石英・チャートやや多く 含む | | 19 | |
| 浅黄橙~灰白 | | 長石・クサリレキわずかに含む | | 19 | 3 |
| 灰白~にぶい橙 | | クサリレキ・雲母含む | | 19 | |
| 褐灰~灰 | | 長石・石英・チャートわずかに含む | | 19 | 3 |
| 褐灰~灰黄褐 | | 微細な長石・チャート・石英・クサリ レキ含む | | 19 | 3 |
| にぶい橙~橙 | | 微細な長石・雲母・クサリレキ・石英 多く含む | 底部回転ヘラ切り | 19 | 3 |
| 灰褐~橙 | | 長石・クサリレキやや多く含む | | 19 | |
| にぶい黄橙~灰黄褐 | | 長石・チャート多く含む | | 19 | |
| 橙~にぶい橙 | | 長石・石英・クサリレキ多く含む | 底部回転ヘラ切り | 19 | |
| 橙 | | 長石・石英・クサリレキ含む | 底部回転ヘラ切り | 19 | 3 |
| 灰褐~にぶい赤褐 | | 長石・チャート・雲母・クサリレ非常 に多く含む | | 19 | |
| 灰黄褐~明赤褐 | | 長石・石英・チャート・クサリレキ多 く含む | | 19 | |
| にぶい黄橙~褐灰 | | 長石・石英・雲母多く含む | | 19 | 3 |
| にぶい黄褐 | | 長石・チャート・石英多く含む | | 19 | |
| 灰~灰白 | やや良好 | 長石やや多く含む | | 19 | |
| 灰~暗灰 | やや良好 | 長石・チャート多く含む | 底部回転糸切り | 19 | |
| 灰~灰褐 | やや不良 | 5 mm以下の長石・チャート・石英多く 含む | 底部糸切り | 19 | |
| 灰~暗灰 | 良好 | 5㎜以下のチャート・長石含む | | 19 | |
| 灰~暗灰 | やや良好 | 長石・石英多く含む | 底部糸切り | 19 | |
| 暗灰~灰 | やや良好 | 長石やや多く含む | | 19 | |
| 灰 | やや良好 | 長石・石英・チャートやや多く含む | | 19 | |
| 暗灰~にぶい橙 | | 微細な長石・雲母・チャート含む | 内黒 | 19 | |
| 暗灰~褐灰 | | 雲母・長石・クサリレキ多く含む | 内黒 | 19 | |
| 暗灰~にぶい黄橙 | | 微細な長石・石英含む | 内黒 | 19 | |
| 暗灰~にぶい黄橙 | | 微細な長石・雲母、4mm大の長石含む | 内黒 | 19 | |
| 暗灰~灰白 | | 長石わずかに含む | 炭素の吸着不十分 | 19 | |
| 灰白~灰 | | 長石含む | | 19 | |
| | | | | 19 | |

出土土器観察表(2)

| 遺跡名 | No. | 地区名 | 遺構名 | 種別 | 器種 | 口径 (cm) | 器高 (cm) | 底径 (cm) | 残存状況 |
|-------|-----|-----|--------|------|----|------------|------------|------------|----------------|
| 大歳遺跡 | 33 | B地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | 15.00 | 4.10 | | □縁部1/6 |
| 大歳遺跡 | 34 | B地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | 14.00 | 3.10 | | □縁部1/9 |
| 大歳遺跡 | 35 | B地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | | 3.00 | 5.00 | 底部1/9・体部わずか |
| 大歳遺跡 | 36 | B地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | 11.70 | 3.60 | 6.20 | 口縁部1/12・底部1/5 |
| 大歳遺跡 | 37 | B地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | | 1.70 | 4.90 | 底部1/2弱 |
| 大歳遺跡 | 38 | B地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | | 1.00 | 5.80 | 底部1/4 |
| 大歳遺跡 | 39 | B地区 | 包含層 | 瓦器 | 椀 | | 3.10 | | 口縁部わずか |
| 大歳遺跡 | 40 | B地区 | 包含層 | 瓦質土器 | 羽釜 | | 6.20 | | 口縁部わずか |
| 大歳遺跡 | 41 | B地区 | 包含層 | 白磁 | 碗 | 15.00 | 4.00 | | 口縁ぶ1/9 |
| 大歳遺跡 | 42 | B地区 | 包含層 | 白磁 | 碗 | 15.00 | 2.00 | | □縁部1/7 |
| 大歳遺跡 | 43 | B地区 | 包含層 | 白磁 | 碗 | | 2.20 | 4.70 | 底部1/2弱 |
| 大歳遺跡 | 44 | B地区 | 包含層 | 白磁 | 碗 | | 2.30 | 6.75 | 底部1/2弱 |
| 大歳遺跡 | 45 | B地区 | 包含層 | 青磁 | 碗 | 16.00 | 5.50 | | □縁部1/13 |
| 宇和田遺跡 | 1 | | S K01 | 土師器 | Ш | 7.60 | 1.50 | 6.30 | ほぼ完存 |
| 宇和田遺跡 | 2 | | S D 03 | 土師器 | Ш | 7.20 | 1.50 | 5.60 | 口縁部1/3弱·底部1/3強 |
| 宇和田遺跡 | 3 | | S D 03 | 土師器 | Ш | 7.25 | 1.80 | 6.35 | □縁部1/2·底部1/2強 |
| 宇和田遺跡 | 4 | | S D 03 | 土師器 | 焙烙 | 31.00 | 5.30 | 30.40 | □縁部1/9強・底部1/10 |
| 宇和田遺跡 | 5 | | S D 03 | 土師器 | 焙烙 | 28.80 | 7.00 | 29.65 | □縁部1/2弱・底部1/3 |
| 宇和田遺跡 | 6 | | S D 03 | 土師器 | 焙烙 | 29.60 | 6.25 | 29.20 | 口縁部1/6・底部1/5 |
| 宇和田遺跡 | 7 | | S D 03 | 土師器 | 焙烙 | 26.00 | 4.30 | | □縁部1/4弱・底部1/2 |
| 宇和田遺跡 | 8 | | S D 03 | 陶器 | 擂鉢 | 32.00 | 6.90 | | □縁部1/9弱 |
| 宇和田遺跡 | 9 | | S D 03 | 陶器 | 擂鉢 | | 7.80 | | 口縁部わずか |
| 七反田遺跡 | 1 | | 包含層 | 須恵器 | Ш | 17.00 | 1.70 | 14.80 | □縁部1/12・底部1/8 |
| 七反田遺跡 | 2 | | 包含層 | 須恵器 | Ш | 16.00 | 2.20 | 13.90 | □縁部1/7 |
| 七反田遺跡 | 3 | | 包含層 | 須恵器 | 壺 | | 4.60 | 11.60 | 底部1/8 |
| 七反田遺跡 | 4 | | S D 02 | 須恵器 | 壺 | | 4.10 | 5.10 | 底部1/4弱 |
| 七反田遺跡 | 5 | | 包含層 | 須恵器 | 蓋 | 13.00 | 1.10 | | 口縁部1/6 |
| 七反田遺跡 | 6 | | 包含層 | 須恵器 | 椀 | | 2.75 | 6.40 | 底部完存 |
| 七反田遺跡 | 7 | | 包含層 | 黒色土器 | 椀 | 14.00 | 3.70 | | □縁部1/9 |
| 七反田遺跡 | 8 | | S B 01 | 土師器 | 椀 | 15.00 | 2.50 | | 口縁部1/12 |
| 七反田遺跡 | 9 | | P 1 | 瓦器 | 椀 | 15.40 | 3.20 | 4.45 | 底部1/7 |
| 七反田遺跡 | 10 | | 包含層 | 備前焼 | 擂鉢 | | 7.50 | | 口縁部わずか |

| 色調 | 焼成 | 胎土 | 備考 | 挿図 | 図版 |
|----------|------|---------------------------------|---------------------|----|----|
| 灰~灰白 | | 長石・石英わずかに含む | 炭素の吸着不十分 | 19 | |
| 灰~灰白 | | 長石・石英わずかに含む | 炭素の吸着不十分 | 19 | |
| 暗灰~灰白 | | 精良 | | 19 | |
| 暗灰~灰 | | 長石・石英やや多く含む | 炭素吸着不十分・暗 文の観察不可 | 19 | |
| 灰白~黄灰 | | 長石わずかに含む | 炭素の吸着不十分 | 19 | |
| 灰~灰白 | | 長石・石英やや多く含む | | 19 | |
| 灰白 | | 長石・石英わずかに含む | 炭素の吸着不十分 | 19 | |
| 暗灰~にぶい黄橙 | | 4 mm以下の長石・チャート・石英多く 含む | 炭素の吸着不十分 | 19 | |
| 灰 | | | | 19 | |
| 灰白~灰 | | | | 19 | |
| 灰~灰白 | | | | 19 | |
| 灰白 | | | | 19 | |
| 灰オリーブ | | | | 19 | |
| にぶい黄褐~褐 | | 長石・チャート・石英・雲母・クサリ レキやや多く含む | 底部回転糸切り | 27 | 7 |
| 橙~明赤褐 | | 長石・チャート・石英・クサリレキ非 常に多く含む | 底部回転糸切り | 27 | 7 |
| 浅黄橙~にぶい褐 | 良好 | 長石・チャート・石英・クサリレキ多 く含む | 底部回転糸切り | 27 | 7 |
| にぶい橙~灰褐 | やや良好 | 4 mm以下のチャート・クサリレキ・長 石・石英多く含む | | 27 | |
| 浅黄橙~橙 | | 長石・クサリレキ・チャート・石英多 く含む | 外面煤付着 | 27 | 7 |
| 暗褐~橙 | | 長石・クサリレキ・石英・チャート多 く含む | | 27 | |
| 浅黄橙~暗赤褐 | やや不良 | 長石・石英・クサリレキ・チャート多 く含む | | 27 | |
| 暗褐~明赤褐 | やや不良 | 長石・石英やや多く含む | 明石・堺産 | 27 | 7 |
| 褐灰~赤褐 | やや不良 | 長石・チャート多く含む | 明石・堺産 | 27 | 7 |
| 灰~灰黄 | やや不良 | 長石・石英・チャートわずかに含む | | 37 | |
| 灰~灰黄 | やや不良 | 長石わずかに含む | | 37 | |
| 灰~灰白 | やや不良 | 長石・チャートやや多く含む | | 37 | |
| 灰~灰白 | やや良好 | 長石・チャートやや多く含む | | 37 | |
| 灰~灰白 | やや良好 | 長石わずかに含む | | 37 | |
| 灰白 | やや不良 | 長石・チャート・石英多く含む | 底部回転糸切り | 37 | |
| 灰白~にぶい橙 | | 長石・クサリレキ・チャート・石英多 く含む | 内黒 | 37 | |
| にぶい黄褐~灰褐 | | 長石・チャート・雲母・クサリレキ多 く含む | | 37 | |
| 暗灰~黒褐 | | 長石・石英わずかに含む | | 37 | |
| にぶい褐~暗灰 | やや不良 | 長石・チャートやや多く含む | | 37 | 12 |

報告書抄録

| ふりがな | やまだちくいせきさん | | | | | | | | | |
|--------------|---|---------|------------|---------------------|--------------|------------------|------------------------|---------------|-----------------------|--|
| 書 名 | 山田地区遺跡Ⅲ | | | | | | | | | |
| | (一)明神安乎線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 | | | | | | | | | |
| 巻 次 | 、 / / 川 ろ 1 砂心地 外心 子 木 三日 / 生成人 旧対 / 地間 四日 | | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 兵庫県 | 文化財 | ·調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第367日 | | ., | • | | | | | | |
| 編著者名 | 山田清 | ·朝 | | | | | | | | |
| 編集機関 | | | 博物館 | | | | | | | |
| 所 在 地 | | | | 1 目 1 番 1 | | | | | | |
| 発行機関 | 兵庫県 | | | | | | | | | |
| 所 在 地 | 〒 650- | | | 1410221 | (手泽 5 丁 日 1/ | 1乗1早 TET / | 078-362-378 | Λ | | |
| | | | | | 1子雁01日1 | | | '1 | | |
| 発行年月日 所収遺跡名 | 20104 | ・(平成 | (22年) 3 | - 月 31 日 - ド | | | | 調査面積 | | |
| (県遺跡番号) | 所名 | E地 | 市町村 | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | (m²) | 調査原因 | |
| 宇和田遺跡 | | | | 2006085 | 34° 25′ 54″ | 134° 49′ 27″ | 平成18年10月 16日~11月29日 | 563 m² | (一)鮎原 江井線道 | |
| 大歲遺跡 | 兵庫県 淡路市山田 | | 282260 | 2006084 | 34° 25′ 49″ | 134° 49′ 25″ | 平成18年10月 16日~12月25日 | 401 m² | 路改良• (一)明神 安乎線道 | |
| 七反田遺跡 | | | | 2006086 | 34° 26′ 06″ | 134° 49′ 17″ | 平成18年11月 14日~12月25日 | 896 m² | 路改良事業 | |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な | は時代 | 主 | な遺構 | 主な | 遺物 | 特記 | 事項 | |
| うれだいせき 宇和田遺跡 | 集落跡 | 江戸時 | 代 | 土坑・溝 | | 染付磁器•備 錠前•土師器 | | 錠前 | | |
| 大歲遺跡 | 集落跡 | 縄文時 | 代 | | | 石鏃 | | | | |
| | | 平安時 | 代 | | | 土師器・黒色 | 土器 | 石帯 | | |
| | | 鎌倉時 | 於一 室町時代 | 柱穴 | | 土師器・須恵青磁・白磁・ | | | | |
| 七反田遺跡 | 集落跡 縄文時代 石鏃 | | | | | | | | | |
| | | 奈良時 | 代 | 掘立柱建 | 物跡・柱穴溝 | 須恵器・土師器 | | | | |
| | 鎌倉時代 瓦器・備前焼 | | | | | | | | | |
| 概要 | 字和田遺跡・大歳遺跡・七反田遺跡の3遺跡を調査。縄文時代から江戸時代の遺構・遺物が明らかとなったが、その中心は鎌倉時代前半と室町時代前半の遺構・遺物である。掘立柱建物跡を中心とした集落跡が明らかとなった。各遺跡とも、建物が数棟単位で散在するもので、上記3遺跡が一つの集落的様相を呈していたものと考えられる。 | | | | | | | | | |

写 真 図 版



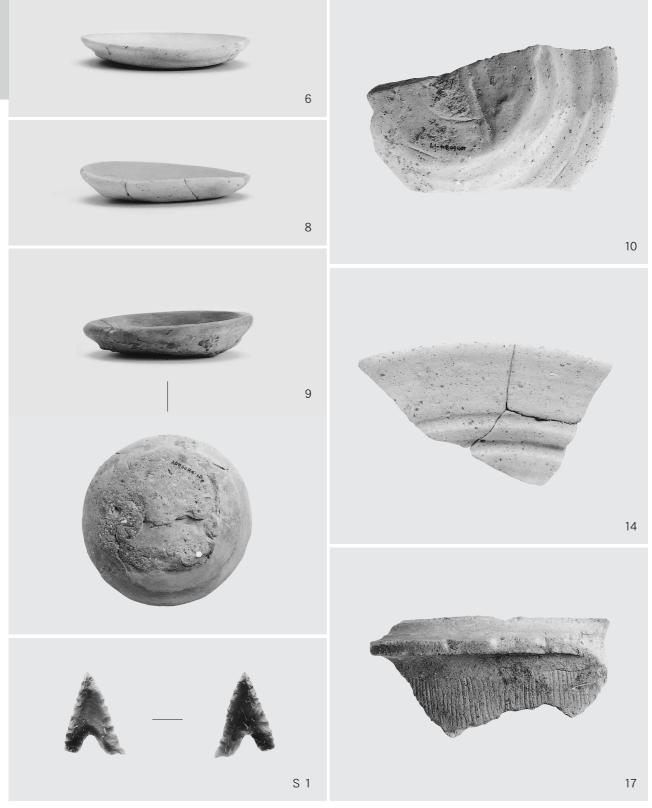
A地区全景 東から



B地区遠景 東から



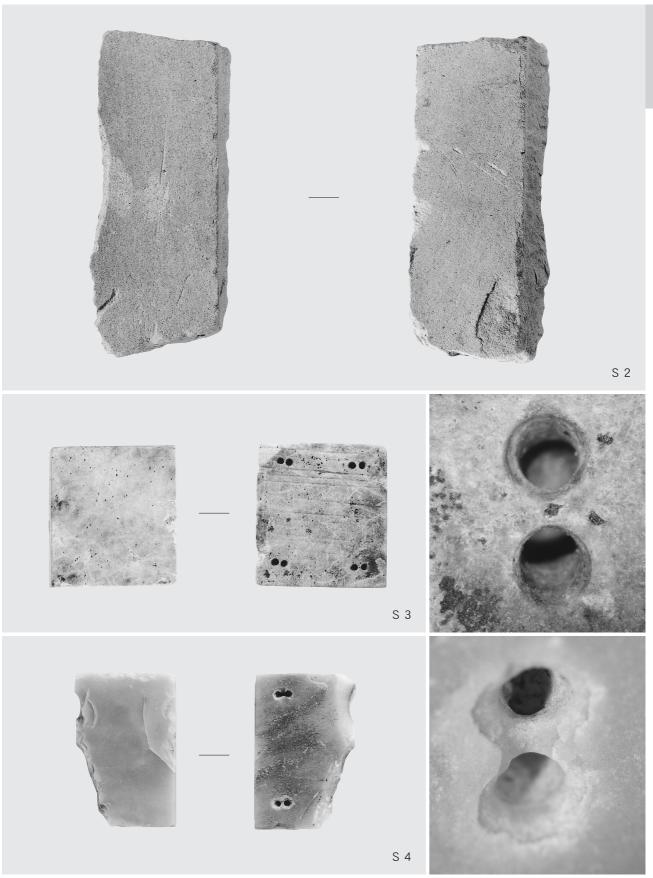
B地区全景 東から



6 · 8 ~10 · 14 · 17: 包含層出土土器 S 1: 包含層出土石器

写真図版 4 出土遺物

大歳遺跡



S2~S4:包含層出土石製品

写真図版 5 遺構



全景 南上空から



全景 北上空から



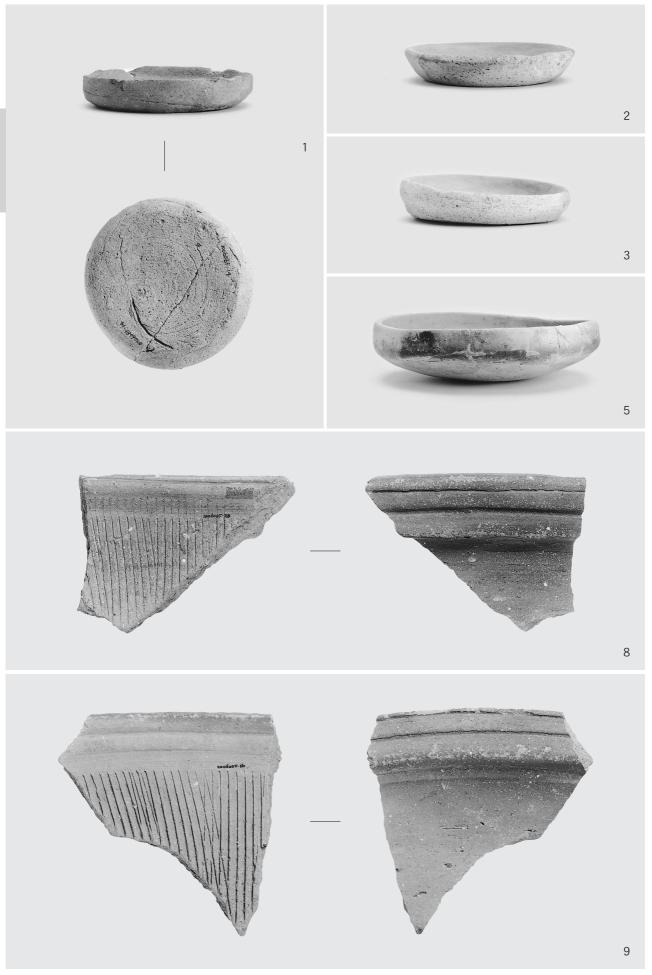


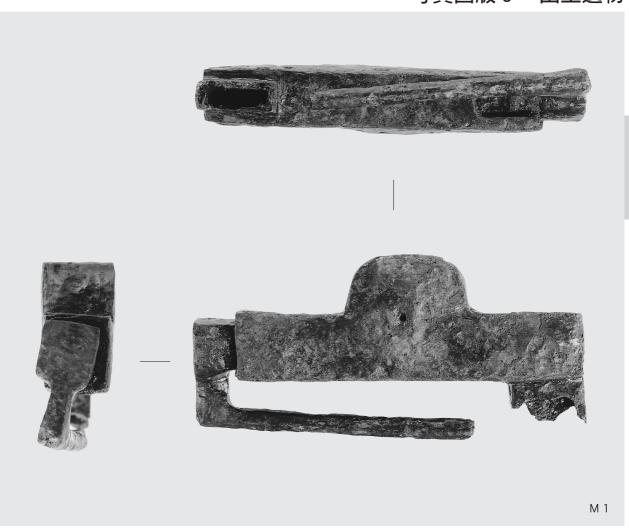
(左)全景 南から (右)全景 北から

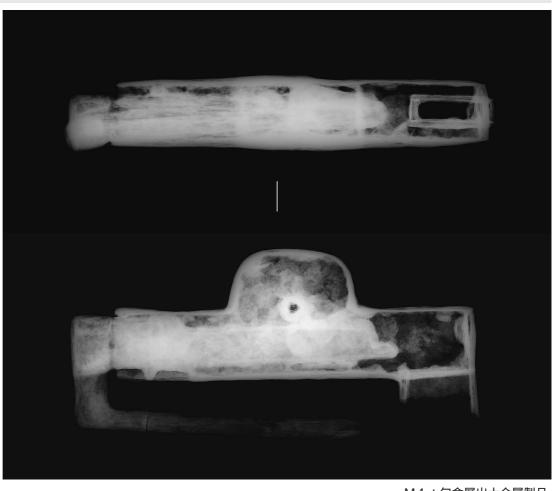


北半部全景 南から

写真図版 7 出土遺物







M 1:包含層出土金属製品



全景 東上空から



全景 北上空から

七反田遺跡



全景 北東から



西半部全景 東から

写真図版11 遺構



東半部全景 東から

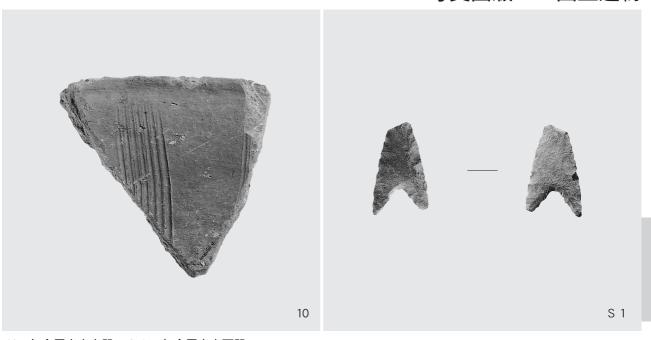


SB01 東から



S D 02 東から

写真図版12 出土遺物



10:包含層出土土器 S1:包含層出土石器

七反田遺跡

兵庫県文化財調査報告 第367冊

淡路市

山田地区遺跡Ⅲ

(一)明神安乎線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成22年3月24日発行

編 集 兵庫県立考古博物館 〒675-0142 加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL 079-437-5589

発 行 兵庫県教育委員会〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印 刷 株式会社ソーエイ〒673-0898 明石市樽屋町6番6号